平成 26 年 8 月 18 日

W 杯 2014 Brasil・南米見聞録

石井　秀明

ブラジル編

今回は無理だ、と自らに言い聞かせていたにもかかわらず、まるで熱病の如くその時期になると血が騒ぎ、FIFA の HP から抽選でチケットを手に入れました。1st ラウンドの 2 試合 4 枚のチケットを引き当てブラジルまで行こうかと逡巡していたところ、五十雀で一緒にプレーしているサッカー狂いの A 氏が、なんとマッチナンバー57・59 という 2st ラウンドの準々決勝を数枚引き当てたのこと、迷うことなくそれに乗っかることとあいなりました。生まれついてのオッチョコチョイな性格で決めた後で日本の裏側まで出かけることの不安や、健康に対する心配が日増しに膨らむのですが、出発直前に決定したその対戦は

- マッチナンバー　**57**　　**ブラジル vs　コロンビア**
  FORTALEZA(フォルタレーザ・カステロンスタジアム 67,000 人収容)
- マッチナンバー　**59**　　**オランダ vs　コスタ・リカ**
  SALVADOR(サルバドール・フォンチノーバスタジアム　65,000 人収容)

のまさに豪華版の組み合わせに狂喜し、日本が敗退して落胆したことも忘れこれゃもうなにがなんでもブラジルへと意気込んでしまいました。

しかし、昨年 11 月には右足排骨を骨折し 2 カ月余りのギブス生活を送り、今年になってリハビリに出かけたスキーで足ならぬ右肩を脱臼、腱を切るというけがを負い、連休には脊柱管狭窄症を再発し痛み止めの薬を欠かせない身となっていました。

こうなったら神頼みとばかり、伊勢神宮まで参拝し手に入れた厄除けお守りをバッグに縫い付け、いざ出発となったのが 7 月 2 日(水)　11:30 羽田発。メンバーは A 氏の会社の同僚や関係者といったサッカー仲間 11 人、初対面ではあったのですがそこはあっという間に打ち解け、オヤジイレブンいざ出発となりました。

ただし、その旅程は長く、おまけに南米特有ののんびりした仕事ぶりで、飛び立つ直前まで飛行機が決まらず、挙句の果て当日(7/2)の朝に予定の便に乗れないことが判明し、とりあえずロンドンにわたり、その間に次のブラジル行きの便を手配するというまさに綱渡りの旅になってしまいました。

羽田空港　11:30 発　～　ロンドン(HEATHROW 空港)　現地時間で 16:00 着、およそ 12 時間のフライト、そこで 7 時間の乗り換え待ちを経て、ロンドン 22:15 発　～　サンパウロ(GUARLHOS 空港) 現地時間　06:05 着でおよそ 8 時間 30 分のフライト、ここでは 7 時間の乗り換え時間を利用してサンパウロ市街に繰り出しました。(当初の予定ではヒースローから直接フォルタレーザに向かう予定の飛行機がキャンセル)　日本人が作ったという現在は東洋人街に出かけて来ました。サンパウロは大都会で近代的な街並みが印象的なのですが、いたるところで工事中の場所があり現地ガイドに聞いても、いつできあがるのか、W杯の工事なのか、それともオリンピックの工事なのか、通常の補修工事なのかさっぱりわ

からないとのこと、なんとものんびりした仕事ぶりにあきれるやら心配になるやら日本では考えられないことでした。

街並みには、高台に多くある「Favela・ファベーラ」といわれる貧民街も含まれ急速に近代化に動くブラジル国内で、それらは見捨てられたかのごとく点在していました。

人々の暮らしは貧しく、全人口の 20%にも及ぶといわれているファベーラ、そこから成り上がって大金を得るには、一流のサッカー選手になるか、薬物や闇の世界に身を置くかといったところだそうです。まさに貧富、混然一体となってブラジル社会を成している印象でした。

サンパウロに移民として定着した多くの日本人は真面目でよく働き、正直で嘘をつかないと尊敬を集めたそうです。サッカーでも前年のコンフェデレーションズカップで見せた攻撃的で大国を恐れない姿勢を高く評価しており、ブラジルでの活躍を期待していたのに、一体どうしたんだとガイドを介して聞く人もいて思わず答えに窮してしまいました。

なんとも残念　！

ブラジルに来てみると、ろくに勉強もしていなかったのでポルトガル語がまったく聞きとれません。どうせ英語と簡単なポルトガル語を混ぜて話せば何とかなるさぐらいの気持ちで来たのが大失敗、空港職員の話す英語もひどいポルトガル訛りで、なかなか通じません。彼の地に渡った日本人の移民やサッカー選手たちがどんなに苦労したか測り知れないものがありました。しかし日本ひいきと南米人特有の明るさでよく話しかけられ、定食屋に入り朝食を楽しんだり、果物をその場で絞り生ジュースとして出す店で高校選手権のピンバッチをあげて Goiaba(グァバ)ジュースを手に入れたりとちゃっかり過ごしました。

またブラジル名物のユニフォーム(もちろんそっくりの偽物)を路上で売っている店に押しかけ　Desconto por favor　「まけてくれ」の連発、ついに彼の親方まで引っ張り出しまんまと 10 枚もの格安品をゲットし靴紐やら、腕飾りまでおまけで付けてもらいました。

まずはブラジルに勝ったぜ　！　　(笑)

(街中ではこんな人をしょっちゅう見かけては盛り上がっていました)

サンパウロからまた 4 時間かけて着いたのが第一の目的地フォルタレーザでした。ここはブラジル東北部に位置し、その海岸沿いはナンバーワンのリゾート地になっています。高級ホテルが立ち並び早朝からジョギングする人も多く安全な街としても有名なところでした。そこのホテルに着いたのは現地時間で午後 17:00 過ぎになったので羽田から 37 時間余りの長旅となりました。その日はホテル隣のレストランで TV を観ながらバーベキューとしゃれこんだのですが長旅の疲れか皆食欲がなく、ひたすらビールとワインをがぶ飲みし

てはTVにかじりついて観戦しました。やはりポルトガル語は皆目理解できず、
ゴーーーーーーーール　！　ぐらい。それでも試合観戦して大盛り上がりでした。

翌日は、遅くまで寝る人あり早く起きてジョギングする人あり、とにかく快晴で蒸し暑く(30度前後)ほんとに真冬かと思わせる気候でした。全員で朝食をとったのですが、野菜がほとんどなく、20種類を超える果物が所せましと並べられ、中には日本で見たこともないものもたくさんありました。どれもほんとにおいしく、ブラジル人はこれで繊維質をとっているので野菜はなくても大丈夫とガイドが言っていたのですがほんとかなぁ? 食事の後にみんなで海岸を散歩しているとなんとサッカーをしているではないですか中学生から高校生ぐらいとおじさんが1人、5対5のフットサルコートで、下はコンクリート(結構デコボコ)でプレーしていました。しかも**裸足**、11 人の侍は無謀にも入れてくれと身振り手振りで交渉、あっさりＯＫとなりさっそく裸足になり 1 人 2 人と入って行くのですがこれがなかなか、彼らの上体の使い方、全身の身こなしはまさにブラジル独特のものでしようか ？　張り切って入った侍達も時間がたつにつれヘロヘロ状態、おまけに裸足でやることなどないのですから、次第に足の裏が水ぶくれとなり、それがベロリとむけてしまうことになりました。交代したいのですが点を取らないと交代ができないようで代えてくれません。やっと休憩で交代をするのですが足の裏がむけてそれは悲惨な状況となり、ホテルに戻って治療となりました。私も参加したのですがその悲惨な状況を見ていたのでトレシューをはいたまま「これでいいか?」と聞くとなんと OK、どうやらサッカーシューズはダメよということらしいことが判明。これでプレーしたのですが近寄ればかわされ、背中を向けているのでプレスをかければ股抜きをされそうになり、離してしまえばドリブルをかけられ、もっと離すとシュートを打ってくると実に厄介、子供ながらサッカーを知りつくしたプレーに思わず感心しきりとなりました。疲れてきたのですが交代はいなかったのでそばで見ていたオーストラリア人に替ってくれと頼み替ってもらいました。その仲間と話したのですが期待していたのに日本はどうしと言われ、思わずお前らも負けただろうと返答したのですが、それにしてもアジアはだめだったねということになり日本、韓国、イラン、オーストラリアはただのW杯への旅行者だったと愚痴りあいました。ロシアで頑張ろうと言ってはみたものの噂によればW杯アジア枠が減らされ3になるのではと彼らは恐れていました。

それにしても、ブラジルでサッカーができるとは、こりゃ日本に帰って「オレは、ブラジル人にサッカー教えたんだ」と自慢しようとひそかに思ってしまいました。

その後、昼食へと向かいスタジアム近くの日本で言うバーベキュー食べ放題の店でした。屋外の洒落た建物で、日蔭は風が涼しく新鮮な肉をその場で焼いて提供してくれます。ここでは野菜に果物、デザート、コーヒーなどなど、どれも最高、とくにフェイジョアーダ Feijoada(塩漬けしたスネ肉と黒豆の煮物)が素晴らしくこれだけでもおなかが一杯に、またビールが 1 本ずつウレタンの容器に入って出てきて、ぬるくならないようになっていました。ワインは銀製の器に氷を入れて持ってくるのですが赤も白もしっかり冷やしていました。ビールのウレタン容器は日本でも採用したらよいのにと皆納得でした。

好きなものをとって受付で重さを量ります。これがブラジル流食べ放題。しかし全員で割ってもおよそ 3000 円程度のうれしいお値段もちろん飲み代も込みです。

最後に店の支配人が日の丸を持ってきてくれて記念撮影。どこから手に入れたのかなぁやや、白地と日の丸のバランスが違う気がするのですが？ **でも OK　ブラジル　最高　！**

ここからスタジアムへバスで移動。スタジアムの 3Km ほど手前になったところですべての車両が規制されてしまうのでそこから歩きとなります。スタジアムまでの間にビールや水、コーラなどを冷たくして売る人あり、肉を焼いて売る人あり、自転車で曲芸を見せる人あり、バンド演奏あり、金を無心する人ありで楽しみながら 40 分ほど時間をかけてスタジアムにたどり着きましたが足の皮をむいた人がとても辛そうでした。

ここは新しく建てたスタジアムですが未完成、植栽も整わず、まさにとりあえず始めてみましたといったところでした。そういえばクレーンが倒れて死者が出たのはここです。おっかなびっくり近づいたらそこはまさにお祭り騒ぎ、あちらこちらで歌や踊り、コロンビアサポーターと言い争っている人あり、わめいている人のほとんどが酔っ払いで、いずこも同じといったところでしょうか。案内のお姉さんも「北ゲートはこっち」「南はこっち」 とその合間に「Brazil」と大声で連呼、あんたは係員じゃねーのかと思ったのですが、なんとも陽気で、明るい案内でした。皆で入ったのですが席はバラバラ。スタジアムはカナリア一色といった状況でした。コロンビアのサポーターもいて、彼らはまさに命がけで、負けじと必死の応援を繰り広げていました。そしてブラジルなんかなんのその明らかにここでひと泡吹かせてやるといった感じがスタジアムの中でビンビン伝わってきました。

例の、ネイマールけがのシーンはこちらからはよく見えず観客もそれほど騒ぐこともありませんでした。徹底マークをされていたのでまたネイマールが倒された、もしくは倒れたな程度でしたが動かないので不審に思っていたら試合が止まり、タンカで運び出されて行きましたが、ブラジルが勝っていたこともあり観客はねぎらいの拍手と、倒れすぎだろといった感じで受け止めていたようです。

試合後、多くのヘリコプターが競技場の上を飛んでいたので、おかしいとは思ったのですが警備だろうと思い気にも止めませんでした。一旦ホテルに帰ってから言葉はわからないのですが TV ではネイマール一色、ヘリコプターで運ばれたことも知りました。
そして意外な重症、この後の試合に出られないことを知りブラジルもここまでかとうわさをしました。それほど強烈な印象を放っていました。

軽食を取りシャワーを浴び午前 1 時にホテルをチェックアウト、ロビーに集合し翌日の試合観戦のためにフォルタレーザの空港へ移動となりました。ここでも直行便はすべて埋まり、フォルタレーザの空港からサンパウロに向かいそこからリオデジャネイロに移動、またそこから次の目的地のサルバドールに向かうという夜中の強行軍となりましたが、良い試合が観られて思いきってブラジル来てよかったとつくづく思いました。

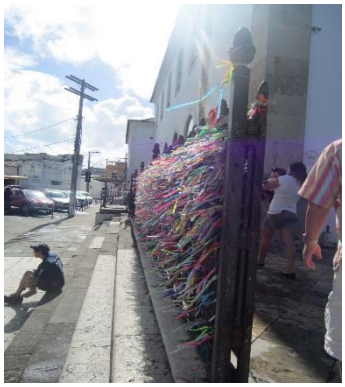
ちょっとおまけです。ブラジル・ポルトガル語といわれる言語の特徴の一つに、単語の最初に来る R は H 音になります。　なので
Rio de Janeiro は　**ヒオ・ヂ・ジャネイロ**　となり　通貨の　Real は　**ヘアウ**　と発音します。リオといっても 10 レアルと言ってもほとんど通じません。
また、単語の途中にある RR の発音は H 音になるので日本でも有名な「シェラスコ」Churrasco は**シュハスコ**となります。その他いろいろ決まりはあったりするのですが基本的にローマ字読みなので、読むのは読めるのですが、どんな意味かさっぱりです。　　ホテルと空港では英語が通じるかといえばそれも怪しく、ひどいポルトガル訛りかスペイン語ふうのしゃべり方で何が何だかといった感じですが、それでも

Boa tarde ボア　タルジ　　こんにちは
Oi　オイ　　やあ
Obrigado　オブリガード　　ありがとう
Sim　シン　はい　　Nao　ナウン　いいえ
Eu sou Japones　エウ　ソウ　ジャポネース　　私は日本人です。
Desconto por favor　デスコント　ポル　ファボール　もっと安くしてください
Chope ショッピ　　生ビール　　Agua Mineral　アクアミネラウ　ミネラルウォーター
Feijoada フェイジョアーダ　肉と豆の煮込み料理　(私の大好物)

これぐらいでなんとでもなるのもまたブラジルの魅力かもしれません。さらに
日本では Brazil　と表記しますがあちらでは　Brasil です。先ほどのリオもそうですが英語読みですね。　通じません勉強は必要ですね。
それでもブラジル人にはよく話しかけられました。
よく意味もわからずとんちんかんな答えをしたと思うのですが、ほとんどのブラジル人が笑顔で対応してくれました。　・・・ありがとう　　Obrigado

なぜ、こんなにも余裕がありみんな明るいのか考えました。飛行機がブラジル国内に入って窓から見ていたのですが、地上に砂漠や岩山が全くなく、緑の木々と川でした。ということは種を播けば必ず何らかの作物が育ち食料になるのでしょう。年平均気温 30゜前後で食べ物があれば飢える心配はないのでしょうね。併せて地下資源にもめぐまれ、国としてのポテンシャルが高く、もっと発展しても良いはずですが、システムに問題があるのか、教育なのか、国民の気質なのか私の眼には本当に摩訶不思議な国に映りました。

さて、サルバドールについたらそこでは雨模様でした。日本が戦ったところも断続的に雨だったと思います。それにしても季節は冬ですが半袖、短パンで、肌寒い地域は南の一部とアルゼンチン寄りで一年中同じような気候だそうです。



サルバドールではガイドのディクソンさんの軽妙なトークに皆疲れも吹き飛び楽しみました。彼曰くブラジル人という人種はおらず、ポルトガル人がこの地に来る前から住んでいた土着の民族(彼は土人と言っていました)とポルトガル人、サトウキビ労働者として連れてこられたアフリカ人がごっちゃに入り混じったのが今のブラジル人だそうです。

人種差別はほとんどなく、経済は上向きで今では不況のポルトガルからの移民を受け入れ、労働力としているそうです。その一方経済が上向きになり余裕の出てきた人々は今までサッカー命で代表が良い成績を収めれば不満が収まっていたのですが、教育、医療、福祉などサッカーにかける巨費を他に廻せるはずだとデモが起きたそうです。
ブラジルもかわりつつあるのですかね　？　しかしブラジル人のブラジルらしさがなくなった時、ブラジルのサッカーはどうなるんでしょうか　？　　無責任ですがそれぐらいブラジルのサッカーは世界にインパクトを与え今でも指示され続けていると思っています。

ちなみに、ガイドのディクソンさんの祖先はポルトガルから来た宣教師をトラブルの末に食べちゃったそうです・・・(笑)　人を食べる習慣ではなく、儀式だったということですが世界中にはいくつかそのような地域であったようですね。

前の写真は日本でも有名な、バイーア州　Bahia ・ボンフィン教会　Bonfim　です。ブラジル最古の教会であり日本で言うミサンガの云われとなったフィタ　Fita 発祥の地でも

あります 3 回結びながら願いをかけ、それが切れた時に願いがかなうといわれています。自分の腕などに結ぶだけでなく大事にしているもの(例えばバッグなど)に結んだり、写真にあるようにボンフィン教会の柵に日本のおみくじを結ぶように願いをかけて結んでもよいとされています。

真っ青な空に、色とりどりのリボン状のフィタが風になびいているところは、それは美しい光景でした。

首都がブラジリアになる前はリオデジャネイロが首都で、それ以前の 1549 年から 1763 年までの 214 年間は、最初の首都として栄えた街だそうです。ディクソンさんの案内でサルバドールの旧市街をめぐりましたが坂が多く、ブラジルの特徴で富裕層と貧困層がはっきり分かれ、坂の上には富裕層の大きな邸宅が残り、海が見渡せる素晴らしいところでした。一方貧困層の住む地域ではせまい路地があちらこちらに延び、坂も多くごちゃごちゃして迷子になったら抜け出せそうにありません。

旧市街中心地は、現在はアフリカ系の住人が多く住み、独特の文化(服装・食事・宗教・音楽・踊り)を持って生きています、そんな中でもサンバやら、ボサノバが流れ、レストランがあり、あちらこちらにお土産を売る露店があり、ビールや食べ物を観光客に売り歩いていました。多くの人々が散策したり、道端にあるテレビの前でサッカーを観戦しながら、ビールやワインを飲み大騒ぎをしていました。ブラジルのビールは薄く、水の質が悪いここでは水代わりといったところでしようか、ワインも同じで甘いものは少なくすっきりとした軽いものが多く特に隣国チリ産のワインは通常の大きさのものがレストランでも 500～600 円といったところで、安くてお得でした。テレビはブラウン管のものがありびっくり、またデジタル液晶タイプで観られるところがあり人だかりとなっているのですが、必ずビールを買わされ試合を観戦することになるのでした。

恐るべし

(サルバドールの旧市街中央広場へ向かう坂道、壁には素敵な絵が描かれていました)

ここサルバドールのスタジアムはフォルタレーゼと違い、古くからあるものに手をいれただけで、道を隔ててファベーラといわれる貧民街に接していて、夜には拳銃の音がしたりするのでくれぐれも気をつけてとガイドに釘を刺されました。

スタジアムの雰囲気は最高でトラックのない競技場がこれほど観やすいものとは思いませんでした。日本でいえば埼玉スタジアム 2002 か鹿島サッカー場になると思うのですが急

な傾斜とせり出した 2 階 3 階席でどこから見てもサッカー観戦をするには素晴らしいスタジアムで手を伸ばせば選手に触れそうに思えるほどでした。

思わず我らが日産スタジアムを思い出しました。あの緩い傾斜やら、2 階 3 階席のせり出し方は建築基準でそうなっているのか、陸上競技連盟に気を使ったのか観づらいことこの上ないですよね、バック、メインスタンドともに一番前から 5～6 列目ぐらいまでは、スポンサーの看板によってタッチラインが見えず、ライン際の選手の足元のプレーがみえないなどサッカーを意識して作られたものとはとても思えません。日本は、プレーするのも、観戦するのもまだまだサッカー先進国とはいえないことをひしひしと感じました。

(サルバドール旧市街の広場、サンバ隊の通過に出会う)

対戦はオランダ vs コスタリカでした。
中米の小国と思われたコスタリカがこの準々決勝まで来ることだけでも驚きでしたが、大国オランダを相手に、ひるむことなく最後まで攻めの姿勢を貫いたその戦いぶりと PK 戦まで持ち込んだ気持ちの強さに、中米のサッカーの魅力、サッカーに賭ける強さを垣間見た気がしました。試合終了後コスタリカチームはサポーター席にあいさつに行ったのですが、スタジアムにいたブラジル人からも大きな拍手と称賛を受けていました。そして、ここまでやれて全力を出しきったというすがすがしさが漂っていました。

結果は残念でしたが反則も少なく、見苦しいプレーもなく、称えられるべき敗者でした。多くのブラジル人たちもそれを理解し、スタジアム全体が暖かい雰囲気に包まれていました。ただコスタリカのサポーターの中には泣き崩れる人々も多く、大きな差がないまさに無念の試合だった事を物語っていました。

そこからバスで戻って、遅い夕食は 10:00 を回っていましたが幸せな時間でした。
ホテルのそばのレストランに入り、わけもわからず注文し、安いチリワインを痛飲、隣にいたイギリス人と意気投合して、香川選手の話で盛り上がりました。彼曰くイングランドの選手はみんな高給取りで W 杯ではまったくやる気がみられなかった、日本はがんばったじゃないかと言われ妙に納得してしまいました。
そして、彼曰く「 U－17 の日本チームは素晴らしく代表チームもあの戦い方をすればいい

じゃないか。日本人にしかできないサッカーだ」といわれてまたびっくり。　恐るべし!
そんなとこまで見てるなんて、我々はまだまだですね。
翌日はサルバドールの市内観光でした、雨が上がり素晴らしい天気となり旧市街の要塞から市民が利用する市場、そしてショッピングモールに出かけました。
　驚いたのは市場でした。狭い市場に 500 近い店が軒を連ね、日用品から洋服、捌いたばかりの牛肉やら生きたニワトリなどがむき出しに並べられていました。肉などは日本であれば当然冷蔵庫で保管なのでしょうが台の上にむき出しで並べられ異様なにおいとともに、内臓や舌、目玉まで売られていました。きっと今日売れる分だけ捌くのでしょう、日本にはないとんでもないものを見た気がしました。
　ショッピングモールで値切ってお土産を購入、そしてブラジル名物路上のユニフォーム売りとの決戦に臨みました。1 枚 100 ヘアウと言っていながら 2 枚になると 250 ヘアウになったりして、敵もさる者それをかいくぐっての値段交渉、最後は「ブラジル」「ブラジル」の大合唱でまんまと半額までまけさせました。まだブラジルが負ける前で「ブラジル　カンペオン」と叫ぶとご機嫌になるブラジル人の底抜けな明るさに羨ましくも思えました。
　夢のような時間もおわり、サルバドールからサンパウロに向かいそこからロンドン行きの飛行機に乗る予定でした。空港で私の担いでいたバックパックに目を付けた係員が「それはだめだ、バゲッジだ、預けろ!」とのたまうのです、「これは行きも担いできたんだ」と必死に抵抗したのですが重さを量らせろと言われしぶしぶ測ったらなんとアウト。後先考えずにお土産を買いこみすぎた罰が当たりました。　「絶対、羽田に着くよね」と念を押したもののバックパックなのでファスナーを開ければすぐ中身を取り出せてしまう構造でしたので覚悟を決め、念のためヒースローでもう一度確認し、一路日本へ
無事到着しました。　・・・　**めでたしめでたし。**
　それ以外は結局何の事故もトラブルもなく、足の裏の皮をむいた人がいたのが唯一の失態(?)かトラブルでしようか。行く前は危ない所だとか、こわいだとか、大変だとか、遠いなどなどいろいろ言われていたのですが本当に行って良かったと感じました。
　あちらこちらうろうろした経験はあるのですが、過去こんなに良かった場所はなかったというのが実感です。
　もう一度行きたい。　ブラジル　最高　！　オリンピック行こうかな　！
　おまけの写真です。ブラジルがポルトガルと戦った時の要塞と大砲だそうです。
いつでも使えると豪語していたのですが、とくに要塞は世界遺産で勝手に入ることができないそうです。大砲も使えるはずがないでしょう。錆びてるし弾がないよね。
あくまでものんきなブラジル人でした。それがまた魅力なのでした。

サッカー編

審判

開幕戦のブラジル vs クロアチアの主審に日本の西村氏と相楽氏、名木氏 2 人の副審が指名されたのは皆様ご存知の通りです。驚きはしたのですが 2 大会連続での FIFA からの指名、前回大会での素晴らしいレフェリング、その後の世界大会における FIFA からの世界大会への指名があり本人、関係者の努力が実りまさに夢のようでした。

例の PK のシーン以外は特に目立った問題もなく、実に堂々としたレフェリングであったと思います。良く知られているように、開幕戦を任されるということはその大会での基準を示せ、と言われているのと同じで FIFA からの信頼でもあるわけです。西村氏に対して FIFA は「あの判定を支持する」とのコメントが出されており、その後の審判員の判定を見ても、足元に対する反則も上半身(特に手のファウル)に対するものもペナルティエリア内でも、それ以外でも極力同じ基準で判断しろと言われているように受け取りました。

批判を受けたことについては個人的な見解ですが、あの PK の判定で PK の笛を吹いて逃げるようにゴールラインの方向へ走って行ったようにみられたことでしょうか。

国内での西村氏の判定でもあまり見たことがないと思います。反則の笛を吹いたら、素早く毅然と PK マークを指差しそこに近寄ることがスタンダードではないかと感じました。

気になったのはいつもよりやや重そうで、軽快な走りに見えないように感じたのは私だけでしょうか、代表のフィジカルコントロールのまずさと同じように、コンディションのピーキングに問題があったのか、いずれにしても海外で笛を吹く、そしてそれが W 杯の開幕戦であれば考えられないような重圧との戦いであったことは間違いないと思います。

本当にお疲れ様でした。

その後のアポイントが決勝の 4th だったことを日本人の目線で勘ぐれば FIFA のアジアに対する信頼はまだまだであるということでしょうか。ヨーロッパと南米の決勝戦で躊躇なくアジア人の主審を指名する日が来ることを祈っています。それにしても UEFA の審判員は日ごろから厳しい試合を裁き、毎日が W 杯のような経験をしていると思えば、本当に真剣に取り組まなければ西村氏に続く審判員を続けて輩出することは大変なことだと感じました。

大会全般では上半身に対してのファウルとくに手を使ったものが、今までに比べきっちり取られているのが印象に残りました。まさに、サッカーというのは手を使えないスポーツなんだということを知らしめるがごとく判定しているように感じられました。

西村氏の次に日本を代表する審判員がだれになるのか、関係者の端くれとしては実に心配です。　日本人の審判員が公正で勤勉、きちんとした判定ができるところを、W 杯で確認したいものです。

選手・大会そして日本

すべてのチームというわけではないのですが、ここに出てくる選手達はなんでも出来なくてはならず、かつ、チームの決まりごとのなかでプレーをしていました。攻撃も守備もこなし、決められたプレーエリアを確保すべく必死に走り、相手のプレーエリアをブレイクするためにまた走っていました。私が初めてW杯をテレビで観た74年西ドイツ大会の1.5倍は走っている気がしました。自由にプレーをしていたのはわずかな選手達で、守備の役割を免除されたアルゼンチンの**メッシ**はチャレンジしてボールを取られても他の選手がカバーしました。ボールを預けられ自由にやらしてもらったのがブラジルの**ネイマール**。左サイドに位置した時、自分のタイミングで仕掛けに行ったポルトガルの**クリスチアーノ・ロナルド**などと限られた選手のみでした。

中南米の選手達のコンディションは際立ってよく見えました。なぜだか分りません。「空気」でしょうか暑い日差しあり、土砂降りあり、涼しい気候あり、湿度が高い日あり、なんでもありました。真冬だったのに。とくに南米の選手たちはほとんどがヨーロッパでプレーしているにも関わらず平気そうに見えました。W 杯予選をホーム&アウェーで戦っていますからへっちゃらなんでしょうか。またサポーターがそれぞれの国からバスや自家用車、果てはバイクでブラジルに馳せ参じまさにこの日のために日頃は働き、命をかけて代表チームを応援していたように思えました。週末に自分のチームを応援するのと同じように仲間と連れだって、時には命の危険にさらされながら国境を越えて来ていたと思います。そのすさまじいほどのパワーを受け中南米勢は奮闘したのだと感じました。

このW杯での選手たちは、天才的なあるいはインテリジェンスあふれるプレーといったものは少なく、攻守の切り替えのポイントを間違わずボールを奪い取り、チャレンジ&カバーなどでなく、自分の意思でチャレンジし、やられても追い付いてまた取ろうとして、その奪い取ったボールを見方のトップ、もしくは相手にとって危険な選手に躊躇なくすぐさま正確に預けようとしていました。
日本も南アフリカの時より進歩をしていたのでしょうが、その進歩のスピードやチームとしてのコンセプトなどいろんな意味で世界レベルの進歩のスピードから遅れてしまったのかも知れません。

サッカー大国だったドイツはユーロで惨敗し、立て直すのに10年以上の時間と莫大な費用を投入し、選手と指導者の育成に着手しました。ドイツとしての方向性は変わらず、さらに手厚く強化し、良い選手をすくい上げる目を持つ人を多く育てたと感じました。

そして今回初めて南米で行われた大会でチャンピォンとなりましたが、そのチームには天才はおらず誰か抜けたら困るといったチームではなかったと思います。ただし、GKのノイアーの広い守備範囲と高い戦術理解、正確なフィードは他国の GK に抜きんでていまし

た。
　一方のアルゼンチンはメッシという天才を最後まで生かしきれなかった感がありました。クラブで輝いたたように代表ではうまくいかなかった原因は何なのか、彼のような天才はアルゼンチン国内でなくスペインで作られたのだからでしょうか?
天才は生まれついてのものなのか、創られていくものなのか、いろいろ考えてしまいます。

　そして日本はどうだったのでしようか
体力、体格で劣る部分をパスサッカーで補い、前回守備的と批判されたこともあり、攻撃的に出ればもっと勝てたはずと勘違いをし(マスコミでしょうか ？) 自分たちのサッカーをすれば勝てるとばかりに攻撃的に戦いました。
　結果はご存じのとおりです。トップ 10 に入れる力などまったくなかったのでしょう。前回の南アフリカ大会では直前で堅守速攻に舵を切った岡田氏は素晴らしい判断だったと思い知らされました。
　いろいろなことが起こるのが W 杯なので仕方がないのですが、本当に進むべき道はよかったのでしょうか、日本サッカーの方向性を模索するのであれば、結果への批判はナンセンスで日本にとって良いサッカーだったかを考えればよく、結果だけを求めるのであれば、守備が強力でないチームは W 杯で勝てないのは当然でした。
　そして、あんなに体のキレがない原因は何だったのか、体ではなく精神だったのかをきちんと分析・公表すべきでしょう。代表は明らかにピークを過ぎて現地入りしてしまったはずです。　結果と内容両方を求めるほど日本のサッカーは成熟していないしそれは思いあがりだと思います。みんなが代表はスペインのようにボールをポゼッションしパスをつなぎまくって勝つと思っていた気がします。ドイツはスペインにならずスペインに勝つために工夫をし、前回チャンピォンよりも強いチームを作る努力をして、ブラジルに来たと思われます。日本はスペインを目指してスペインになりたかったようです。
　W 杯が終わると何もなかったように、マスコミもサポーターも煽って世界一を目指す戦いなどといっていたことを反省すべきです。優勝と口にした本田も、それに同調したマスコミもしかるべき懺悔があって当然ですが聞こえてきません。次のロシアまで、このことを常に忘れず議論し、日本のサッカーとは何か、どうしたらよいのか関係者すべてが考えなければならないし、絶対負けられない試合ばかりでない筈です。

　なんだか偉そうに書いてしまいましたが、W 杯　やはり現地で観ることが一番ですね、その後をいろいろ考えるネタになりました。このネタで飲み会の度に話題にし、次のロシアまで貯金をすることだけは決定しました。

以上